

学齢期の障害児をもつ家庭支援で、考えていくことや考えられることは？

= 相談支援部会ワーキングAグループ

(学齢期の家庭支援) 見学参加者アンケート意見から =

< 済美教育センター見学後の意見 >

学齢期の相談では、具体的なアドバイスを聞けるところがあると良い。

学齢期からの具体的な支援や現在までの流れがわかると本人理解に繋がると考える。

学齢期～成年期～老年期へと、継続した支援の連携を図ることの重要性を感じた。

児童の周りの環境(病院、余暇活動、困った時に気軽に情報を聞ける場所等)を整備し、明確にしてゆく必要を感じた。

うまくいっていない事例を紹介していただくことで、考えていけると感じた。

済美教育センターが教育相談の役割をもち、家庭支援が必要な場合には、子ども家庭支援センター等との連携をとっていることがわかった。では、相談支援事業所がそこにどう関わっていくことができるのか、考えさせられた。

学齢期以降、または学校生活以外の社会とのつながりをどうしているのか、どう橋渡しをしているのか、どこを課題だと感じているのか、など一緒に考えていきたいと思った。学校経営支援を考えると難しい部分があるというような話もあったので、複数の機関が連携をとり、本人にとって閉鎖的な状況での支援にならないようにする必要性を感じた。関係機関との連携の大切さと学齢期以降の家庭支援の対策が必要性を感じた。

家族へのサポートについては意識していたつもりでしたが、直接の働きかけになるとまだまだ弱いと改めて感じた。相談支援事業所が家族本人に障害の受容支援を行う場合、他の児童の支援事業所との連携が必要になると思える。

< 永福学園見学後の意見 >

永福学園の外部専門職を導入したチームによる教育支援など良かったと思う。しかし、生徒が卒業後に、同じような厚い支援が継続して受けられるような施設があるかどうか疑問に思った。地域の施設等、資源の充実が今後の課題の一つではないかと思った。教室にいる保護者の姿を見て、学齢期のケアは親が中心という実態を実感した。紹介のあったPTAによるアンケートからショートステイの利用や学童保育を望む声が多いことから、学齢期の障害児の社会資源の必要性を感じた。

教職員と外部専門家による手厚い教育体制の中で学んできた障害児が、卒業すれば学校とははるかに少ない支援体制の施設入所となる。その時、本人・家族はそのギャップをどのように感じ、受け止めていくのか気にかかる。

介護者の「介護うつ」の話も聞くので、重度・重複障害児を持つ家族の健康状態等の把握も、今後、考えていかなければならないと思う。